

平成29年度 文教委員会資料⑥

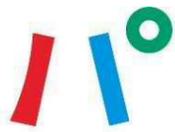
【所管事務の調査（報告）】

かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョンの検討状況について

- 資料1 かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョンの策定に向けて
～第1期推進ビジョンの総括（成果と課題）～
- 資料2 かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョン策定に向けた基本的な考え方
- 資料3 かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョン策定に向けた基本的な考え方
～レガシーについて～

市 民 文 化 局

（平成29年8月29日）



めざせ! やさしさ日本代表!

かわさきパラムーブメント

かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョンの策定に向けて

～第1期推進ビジョンの総括(成果と課題)～

1. 行政計画としての第1期推進ビジョンの課題

かわさきパラムーブメントで「目指すもの」と「理念」

・「目指すもの＝理念」となっているので、第2期推進ビジョンでは、パラムーブメントによって何を目指し(ビジョン)、どのような理念のもとに取り組むのか等の点について明確化する必要がある。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会との関係

・策定の目的に「東京2020オリンピック・パラリンピックを契機」と明記しながら、取組期間では「第1期：開催につながる取組期間」「第2期：大会を成功させる取組期間」とあるように大会自体が強く意識されていることから、ビジョンに基づく取組と大会との関係を整理する必要がある。

2. レガシーについての課題

かわさきパラムーブメントにおけるレガシーの考え方

・かわさきパラムーブメントにおけるレガシーについて、第1期推進ビジョンでは「遺産」としているが、「目指すもの」と「理念」の関係を整理することを踏まえ、改めて基本的な考え方を示す必要がある。

レガシーの整理統合

・第1期推進ビジョンで掲げている理念等とレガシーとの関係が不明確であることから、新たに明確化する「目指すもの」と「理念」との関係を整理するとともに、それらを踏まえたうえで、統廃合を含めて改めてレガシーを見直す必要がある。

レガシーの見える化

・レガシーとして形成されたことを分かりやすくするため、可能な限り客観的な指標を設定する必要がある。

<参考>第1期推進ビジョン「かわさきパラムーブメント～その背景と目指すもの～」

● 将来の課題を先取りする

今、日本は少子高齢化、人口減少社会へと向かっていますが、この問題は人口が増え続ける川崎市も例外ではありません。将来人口推計によると、東京2020大会が開催される2020年、本市の高齢化率は21%を超え、2030年の152.2万人をピークにその後は減少へと転じていく見込みです。高齢化の進行に伴い、心身に障害を持つ人や介護が必要な人が増えることが想定されますが、持続可能なまちづくりを進めるためには、人口減少社会を見据え、一人ひとりが尊重され、能力を発揮することができる環境づくりを進めていくことがとても重要になります。

● パラリンピックに重点を置くということ

パラリンピックは大会を追うごとに参加国とその選手の数が増えていると言われていています。このパラリンピックを未来につながるダイバーシティ(多様性)とインクルージョン(さまざまな人が自分らしく社会の中に混ざり合えること)の象徴と捉え、パラリンピックに重点を置くという方針を打ち出しました。

● 「かわさきパラムーブメント」から市制100周年へ

そこから生まれたのが「かわさきパラムーブメント」の理念です。パラリンピックを応援することにとどまらず、障害のある人が生き生きと暮らす上での障壁となっている、私たちの意識や社会環境のバリアを取り除くことや新しい技術でこれらの課題に立ち向かうことを「ムーブメント」としてさまざまな分野で展開していくことを目指しています。

● 「かわさきパラムーブメント」の5つの方向性

世界最大のスポーツと文化の祭典であるオリンピック・パラリンピックの特徴や本市の強みを踏まえ、政策領域を幅広く捉える5つの方向性を設定し、これまでの取組の深化と加速度的な推進を目指します。

次ページ以降で整理

3. 第1期推進ビジョンに基づく取組について

かわさきパラムーブメント推進フォーラム

- ・市民、団体、企業、行政等がパラムーブメントの理念を自分のこととして行動を起こしていくために必要な仕掛けについて意見交換し、実行していくことを目的とする外部連携組織
- ・平成27年10月の設置以来33件の提案を受け、そのうち5件をリーディングプロジェクトとして多様な主体が協働で平成28年度から実施

★5つのリーディングプロジェクト

★パラムーブメントの理念浸透

- ・市職員や市内事業所・団体向けの講演会やシンポジウム、プロモーションイベントを開催し、かわさきパラムーブメントの考え方を広く共有

★パラスポーツやってみるキャラバン

- ・小学校や地域の寺子屋にて障害者スポーツ体験講座を計23回実施し、障害への理解や、学校や地域の障害者スポーツへの関心を高める機会を創出

★インクルーシブなカワサキハロウィン

- ・あらゆる人が個性を大切にしながら楽しめるハロウィンイベントとして車椅子ユーザーが初参加

★アクセシブルシティかわさき

- ・市内ぐるなび加盟店のバリアフリーの現状を調査し、利用者の参考となる情報の発信方法等について検討

★宿泊施設等バリアフリー化促進

- ・観光拠点となる市内の宿泊施設20ヶ所と、生田緑地と緑地内文化施設のバリアフリーに関する現状調査を行い、今後の展開に向けた基礎データを収集

各局区の取組

- ・パラムーブメントの推進に向けて、「ひとつづくり」「スポーツ・健康づくり」「まちづくり」「都市の魅力向上」「先進的な課題解決モデルの発信」の5つの取組の方向性に基づき各局区が主体的に取り組む事務事業(既存・新規)で、障害のある方への理解促進や社会参加に資するような取組を中心に、総合計画実施計画の事務事業ベースで66事業、ビジョンとしては102の取組を推進

戦略的広報

- ・パラムーブメントの理念浸透に向けて、戦略的な広報に取り組み、29年度にはロゴやステートメント、動画、グッズなどを作成

めざせ! やさしさ日本代表!

みんなの違いを活かせるチーム。
障がい、年齢、人種やLGBT
いるんな個性をチャンスにしよう。
川崎らしく、力強く、
未来を築いていく力は
私たちの中にある。

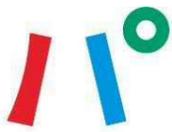


かわさきパラムーブメント

<2期ビジョンに向けた課題>

- ・多様な市民(主体)がゲストとしてだけでなく、キャストとしても参画してムーブメントを起こしていく必要がある。
- ・レガシー(後述)の形成に向けて、各局区がこれまで以上に主体的に取り組む必要がある。
- ・リーディングプロジェクトの実施結果を踏まえ、次のステップへの展開を図る。
- ・障害のある方をはじめとする社会的マイノリティと健常者が一緒になって、参加型のプロモーションイベントを展開する。

これらの課題を踏まえ、第2期推進ビジョンにおける具体的な取組に反映する。



めざせ! やさしさ日本代表!

かわさきパラムーブメント

かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョン策定に向けた基本的な考え方

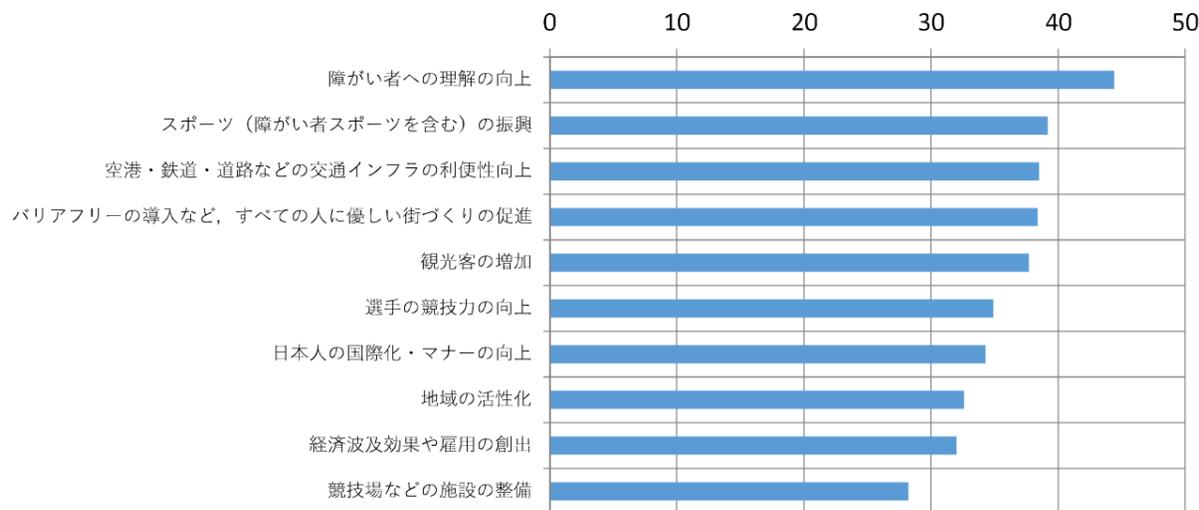
1. 策定の目的

- 2020年、東京で56年ぶりにオリンピック・パラリンピック競技大会が開催される。本市は開催都市に最も近い都市の1つであるが、競技が行われるいわゆる「準開催都市」ではない。
- しかしながら、大会が近づくにつれ人々の関心や機運が徐々に高まり、大会期間中には多くの市民の方が実際に競技会場に足を運んだりするのはもちろんのこと、本市の立地の良さから、国内外の多くの人々が本市を訪れることが予想される。
- また、大会後においてもオリンピック・パラリンピックレガシーとして、本市を含む社会全体に対して様々な良い影響を遺していくことも予想される。
- 第2期推進ビジョンは、第1期の取組を踏まえつつ、こうした大会の持つ価値を最大限に活用することを前提に、「成長と成熟の調和による持続可能な最幸のまち かわさき」の実現に向けて、何のためにパラムーブメントを推進するのかという「目指すもの」と、その実現に向けた基本的な考え方としての「理念」、さらに未来へ遺していくものとしての「レガシー」を明確にして市民と共有し、そのための取組を計画的に進めていくために策定する。

2. 社会的背景

- ① 少子高齢化・人口減少社会など人口構成の変化を見据えた対応**
本市においても将来予想される人口減少と急激な高齢化を見据え、心の豊かさを実感できる持続可能な社会の構築に向けて、多様な価値観の中で市民一人ひとりが互いの違いを認め合いながら、誰もが活躍できる環境を創出していく。
- ② ダイバーシティとソーシャル・インクルージョン※に関する法令等の整備**
持続可能なまちづくりが求められる中、一人ひとりが尊重され能力を発揮することができる社会の実現に向けて、ダイバーシティとソーシャル・インクルージョンの考え方が極めて重要となる。国においても障害者差別解消法の制定やユニバーサルデザイン2020行動計画の策定など社会的マイノリティに対する法整備等も進んできており、本市としてもこれらに対応した取組を進めていく。
- ③ 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催**
内閣府の「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査(H27.6 調査)」では8割を超える人々がオリンピックに、7割を超える人々がパラリンピックに関心があるとしており、また、大会開催で期待される効果として、次のグラフのとおり「障がい者への理解の向上」が最も高まっている。

東京2020オリンピック・パラリンピック開催で期待される効果



資料：内閣府「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」(平成27(2015)年6月) ※上位10項目を掲載

3. かわさきパラムーブメントによって目指すものと理念

【目指すもの】

誰もが自分らしく暮らし、自己実現を目指す地域づくり

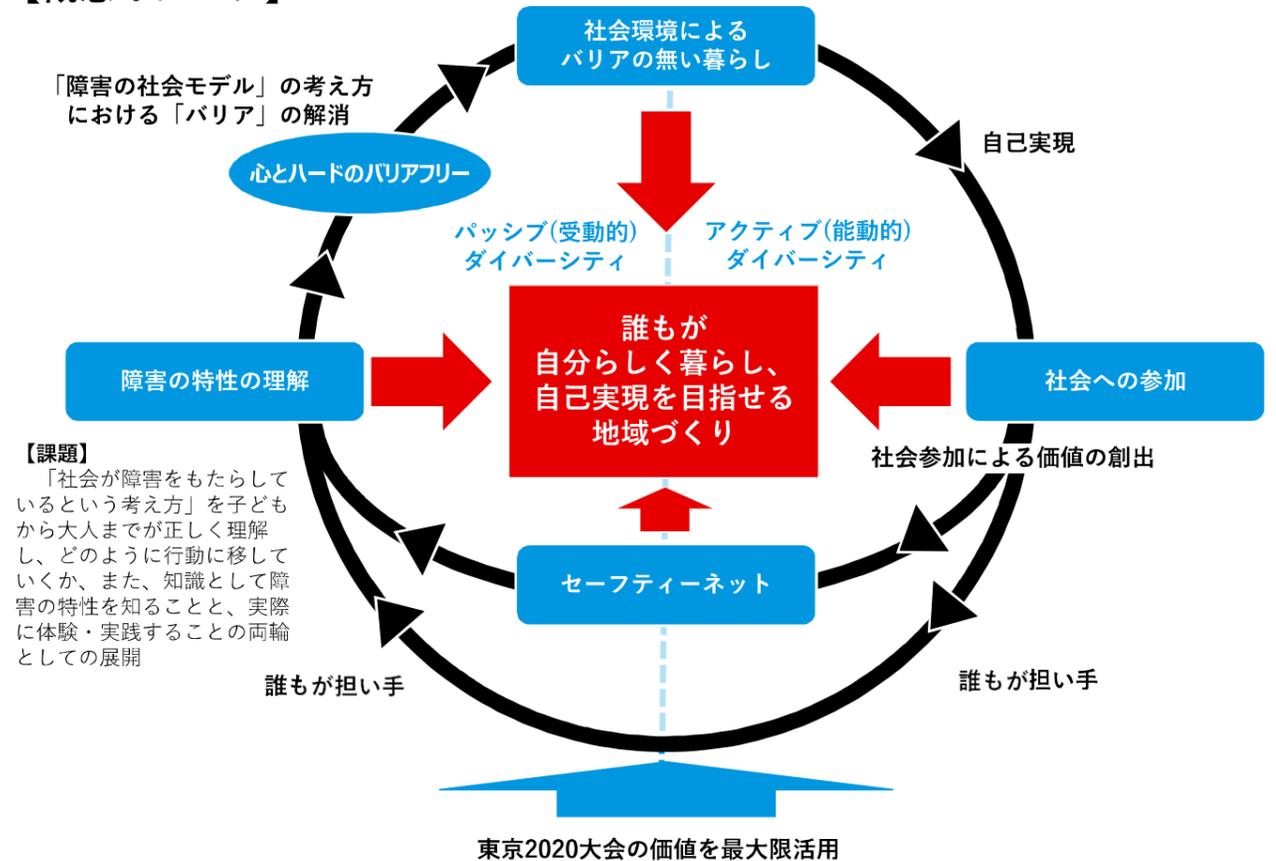
- 人口減少、少子高齢、低経済成長の時代にあって、誰もが自分らしく暮らし、さらに自分の個性や能力などに応じて自己実現を図り、その結果、社会の一員として活躍できる社会を目指す。
- そのために、障害、年齢、人種、LGBTなどの個性をチャンスと捉え、新たな価値を創造していくというビジョンを市民全員が共有し、主体的に行動することを促していく。

【理念】

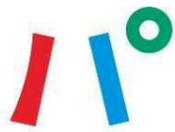
人々の意識や社会環境のバリアを取り除き、誰もが社会参加できる環境を創出すること

- 障害者をはじめ、いわゆる社会的マイノリティとされている人たちが、生き生きと暮らす上での障壁となっている、私たちの意識や社会環境のバリアを取り除くことや新しい技術でこれらの課題に立ち向かい、誰もが社会参加できる環境を創出することを理念とする。
- 本市では多くの市民の興味・関心を惹く強力なコンテンツである東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を契機に、多様性(ダイバーシティ)と社会的包摂(ソーシャル・インクルージョン)の象徴としてのパラリンピックに重点を置いた取組によりムーブメントを起こしていく。

【概念イメージ】



※ソーシャル・インクルージョン(社会的包摂)… 今日的な「つながり」の再構築を図り、全ての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合うこと(「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」報告書 平成12年厚生省)



かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョン策定に向けた基本的な考え方

めざせ! やさしさ日本代表!

かわさきパラムーブメント

4. レガシー形成の考え方

【オリンピック・パラリンピックにおけるレガシー】

- オリンピック・パラリンピック開催都市において、各種施設やインフラの整備、スポーツ振興等が図られることにより、社会に有形・無形の持続的な効果が生み出されるが、IOCによればレガシーとは、こうした効果のうち「長期にわたる、特にポジティブな影響」とされる。
- 2012年大会の開催都市決定プロセスから、開催都市として立候補する段階での言及が必要な項目とされる。→大会の成功に向けて取り組んだ「結果としてのレガシー」から「レガシーの目標化」に変化している。
- 特に成熟国家・都市である現在の日本・東京においては、どのような社会課題の解決を創出するのかといったレガシーを残すことが重視される。

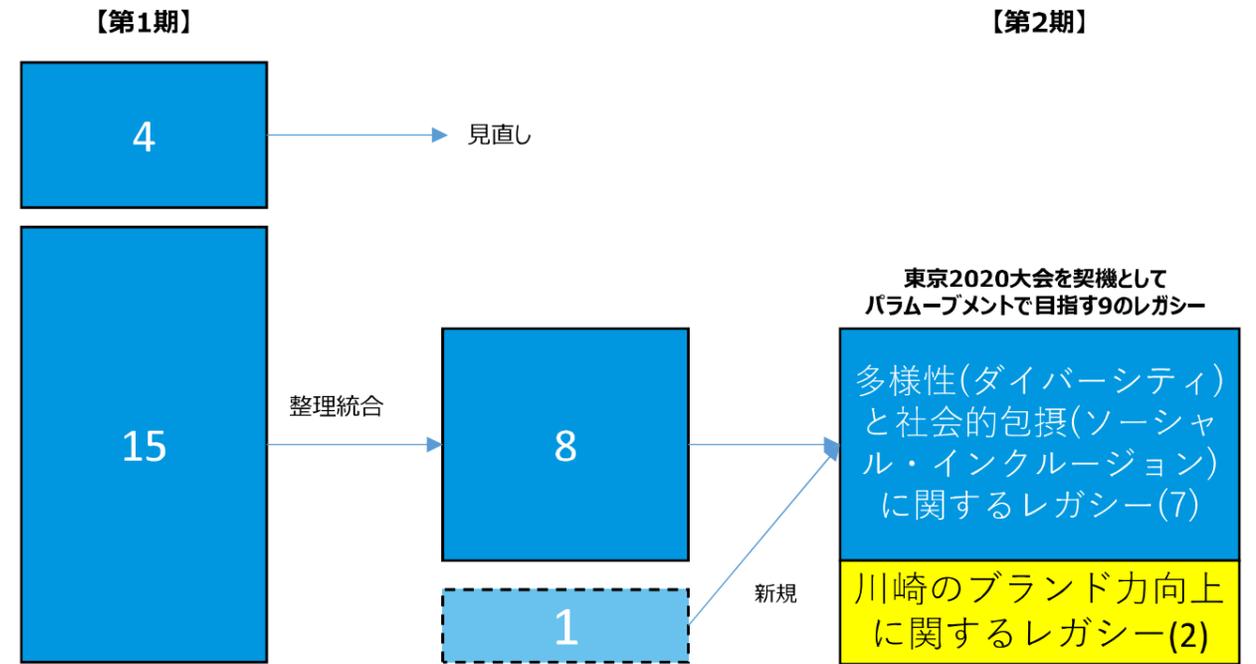
【本市におけるレガシー形成に向けた考え方】

- オリンピック・パラリンピック東京大会開催時の社会課題
1964：戦災復興、国民の自信回復 → インフラを中心とするレガシー→高度経済成長の礎に
2020：人口減少、少子高齢、低経済成長→レガシーはソフト中心

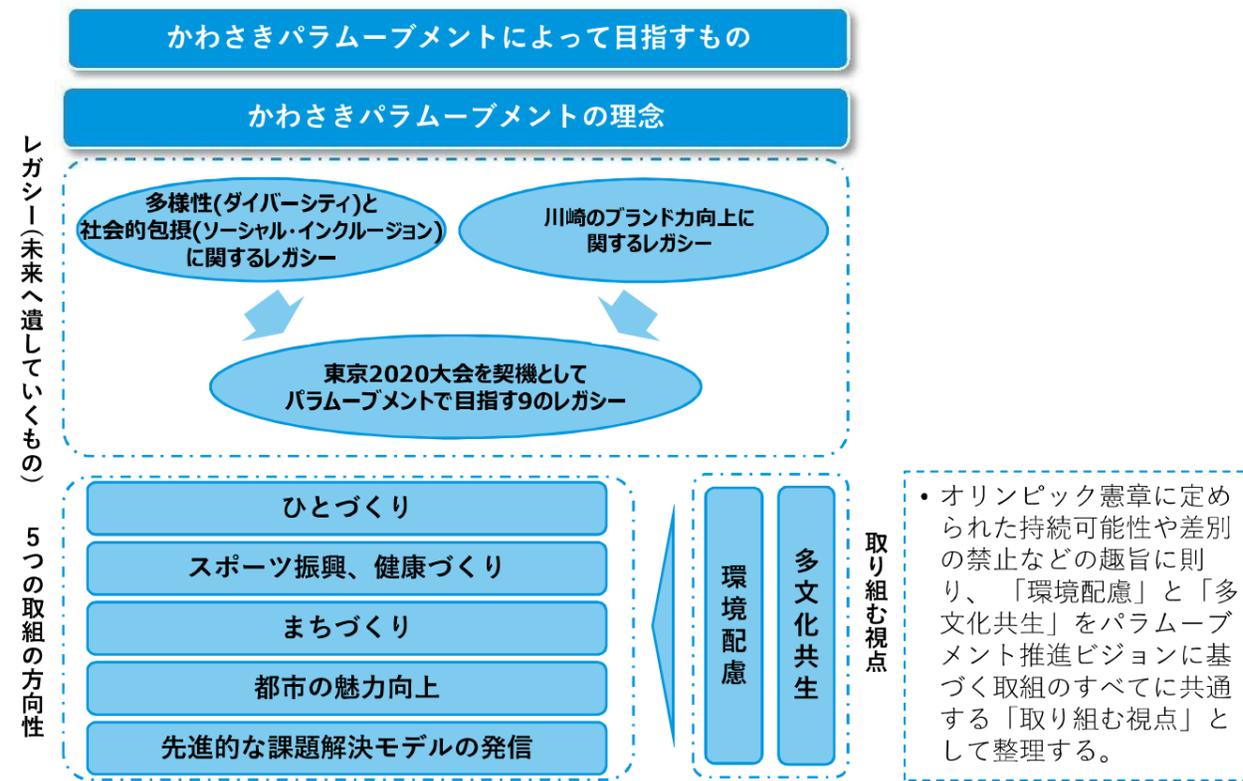
「誰もが自分らしく暮らし、自己実現を目指せる地域づくり」に向けて
かわさきパラムーブメントの取組により未来へ遺していくものをレガシーとする

- レガシーは、「多様性(ダイバーシティ)と社会的包摂(ソーシャル・インクルージョン)に関するレガシー」と「川崎のブランド力向上に関するレガシー」の2つに大別する。
- 「かわさきパラムーブメントによって目指すもの」と「かわさきパラムーブメントの理念」を踏まえ、現在の19のレガシーの整理統合等を行い9のレガシーとする。
- あわせて可能な限り年限付きの数値目標を設定し、その数値目標は、達成に向けて市民全員が取り組み続けるための指標としての位置付けとする。

レガシーの整理統合イメージ



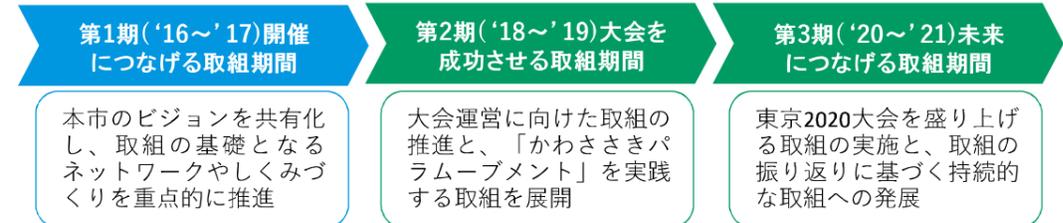
5. 第2期推進ビジョンの体系イメージ



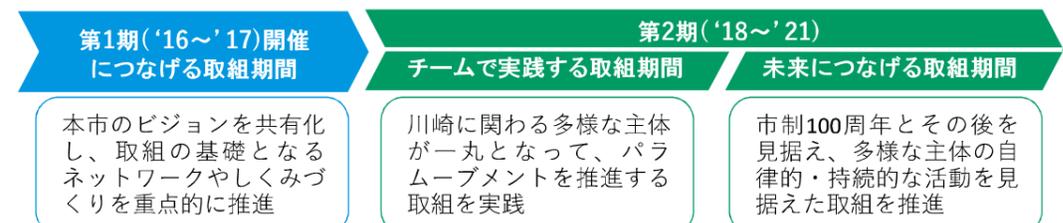
6. 第2期推進ビジョンの取組期間

- かわさきパラムーブメントは、東京2020大会の成功そのものというよりは主に大会を契機として本市の課題解決に取り組むものであるが、これまでの3つのフェーズは大会の開催が強く意識されたものとなっている
- 取組期間が2年ごとのため、第3期推進ビジョン策定の際に総合計画実施計画策定のスケジュールと合わず、事業調整が困難になることが想定される。
- 第2期推進ビジョンでは取組期間を2018年度から2021年度までの4年間とし、前半を「チームで実践する取組期間」、後半を「未来につなげる取組期間」と改める。

<第1期推進ビジョンでの取組期間>



<第2期推進ビジョンでの取組期間>



I. 見直しを図る第1期推進ビジョンのレガシーについて

第1期推進ビジョンにおける次のレガシーについては、かわさきパラムーブメントによって目指すものと「かわさきパラムーブメントの理念」から導き出すことが難しいことから、第2期推進ビジョンでは、次の考え方により整理します。

第1期ビジョンのレガシー	考え方
多文化共生の社会 低炭素化の推進による地球環境問題解決への寄与	<ul style="list-style-type: none"> オリンピック憲章に同様の趣旨のことが定められていることから、「多文化共生」「環境配慮」をかわさきパラムーブメントの取組の推進にあたっての「視点」として整理します。
国際社会に貢献できる人材	<ul style="list-style-type: none"> 社会全般として大切なことですが、「かわさきパラムーブメントによって目指すもの」や「かわさきパラムーブメントの理念」からは、直接的に導き出されるものではないことから、レガシーとは位置付けられないこととします。
羽田空港を核とする成長戦略拠点と連動した交通ネットワークの形成	<ul style="list-style-type: none"> 羽田連絡道路については、東京2020大会を目指して整備するものの、大会を契機として取り組むものでないこと、また、「かわさきパラムーブメントによって目指すもの」や「かわさきパラムーブメントの理念」からは、直接的に必要とは言えないことから、レガシーとは位置付けられないこととします。

II. 多様性(ダイバーシティ)と社会的包摂(ソーシャル・インクルージョン)に関するレガシー

① 多様性を尊重する社会をつくる子どもを育むまち

【概要】

「人々の意識や社会環境のバリアを取り除き、誰もが社会参加できる環境を創出」していくには、将来を担う子どもが、障害のある方をはじめとするマイノリティに対して正しく理解し行動できるようにしていくことが重要です。環境教育において見られるように、その波及効果として、子どもへの教育が保護者への教育につながることを期待できます。

また、平成29年2月に取りまとめられた「ユニバーサルデザイン2020行動計画」においては、「すべての子供達に『心のバリアフリー』を指導」が掲げられ、道徳をはじめ音楽、図画工作、美術、体育などの各教科や特別活動等において「障害の社会モデル」を踏まえ、「心のバリアフリー」に関する理解を深めるための指導や教科書等を充実させることが位置付けられています。

こうしたことから、多様性を尊重する子どもの育成が継続されている状態としての「**多様性を尊重する社会をつくる子どもを育むまち**」をレガシーとします。

【第1期推進ビジョンでのレガシー】

- ・新規

【5つの取組の方向性における位置付けとの関係】

- ・ひとつづくり

② 「障害の社会モデル」の考え方における「バリア」が解消されたまち～心のバリアフリー～

【概要】

人には、障害の有無や加齢による心や体の変化、性的指向、国籍など様々な心身の特性や考え方がありますが、誰もが知らず知らずのうちに、「自分とは違う存在である」というような、差別意識とは違う「心のバリア」を作りがちであり、それが言動に表れることにより、当事者に様々な想いを抱かせてしまうことがあります。

また、「ユニバーサルデザイン2020行動計画」においては、各人がこの「心のバリアフリー」を体現するためのポイントは以下の3点であるとしています。

- ① 障害のある人への社会的障壁を取り除くのは社会の責務であるという「障害の社会モデル」を理解すること。
- ② 障害のある人（及びその家族）への差別（不当な差別的取扱い及び合理的配慮の不提供）を行わないよう徹底すること。
- ③ 自分とは異なる条件を持つ多様な他者とコミュニケーションを取る力を養い、すべての人が抱える困難や痛みを想像し共感する力を培うこと。

こうしたことから、誰にもそれぞれ心身の特性や考え方があるという前提に立ち、すべての人々が相互に理解を深めようとコミュニケーションをとり、生かし合うという意識が醸成され、かつ一人一人の具体的な行動が継続されている状態としての「**心のバリアフリー**」をレガシーとします。

【第1期推進ビジョンでのレガシー】

- ・心のバリアフリー

【5つの取組の方向性における位置付けとの関係】

- ・ひとつづくり

かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョン策定に向けた基本的な考え方～レガシーについて～

③ 「障害の社会モデル」の考え方における「バリア」が解消されたまち ～ユニバーサルなまち～

【概要】

「社会環境によるバリアのない暮らし」を実現し、さらに社会参加へと進めていくためには、誰もが自分自身で自由に移動し、日常生活や仕事、趣味など様々な活動を妨げている物理的な障壁や情報に関する障壁を取り除いていくことが必要です。

具体的には、誰もが利用しやすい建物や公共交通環境の整備、移動手段の確保、多言語や視覚・聴覚障害に配慮した案内表示など、ユニバーサルデザインに配慮したまちづくりの推進や、生活に必要な情報の提供をスムーズに受けサービスの利用ができる環境づくりのほか、誰もが安全・安心・快適に使えるモノづくりの促進も必要です。

こうした取組により、ユニバーサルデザインのまちづくりがなされた状態としての「**ユニバーサルなまち**」をレガシーとします。

【第1期推進ビジョンでのレガシー】

- ・ユニバーサル化(バリアフリー化・多言語化の進んだ空間)
- ・多言語に対応した観光施設
- ・市民・来訪者がICTを利用しやすい環境
- ・新たな福祉製品・サービスの創出による国際的な高齢化の課題の解決の寄与

【5つの取組の方向性における位置付けとの関係】

- ・スポーツ振興・健康づくり
- ・まちづくり
- ・都市の魅力向上

④ 誰もが職業等を通じて社会参加できる環境

【概要】

人口減少社会にあって、持続可能で誰もが地域社会で自立していきいきと暮らせるまちづくりを進めていくためには、自らの持つ可能性を信じて能力を最大限に伸ばし、職業等を通じて自己実現できる環境を整えていくことが必要です。

そのためには、「心のバリアフリー」と「ユニバーサルなまち」を前提として、障害のある方の働く意欲の向上、就労マッチングをはじめ、企業に対する支援体制の構築や社会的マイノリティに関する理解促進に向けた普及啓発などにより、短時間雇用を含むさらなる障害者雇用の促進や、誰もが働きやすい職場環境の構築が重要です。

こうした取組の継続により、障害者をはじめとする社会的マイノリティの方の雇用に対する理解が進み就労等ができる環境が整った状態としての「**誰もが職業等を通じて社会参加できる環境**」をレガシーとします。

【第1期推進ビジョンでのレガシー】

- ・障害のある人に配慮した就労環境

【5つの取組の方向性における位置付けとの関係】

- ・ひとづくり

⑤ 多様な主体が地域づくりに貢献しているまち

【概要】

少子高齢化・人口減少社会にあって、持続可能なまちづくりを進めていくためには、共に支え合う地域社会としていくことが不可欠です。現在は障害がなくても、将来、加齢や病気・事故等により心身の自由が利かなくなってしまう可能性は誰にでもあり、誰もが当事者として、障害の有無に関わらずお互いを支え合っていくことが必要であるという考え方を一般的なものにしていくことが重要です。

また、東京2020大会では合計で9万人以上の大会ボランティアと都市ボランティアの活用が想定されており、ボランティアに関する機運が高まっていくことが考えられます。ボランティアなどの社会貢献活動に関する機運が高まることにより、本市では、大会に直接関係しなくてもパラムーブメントに関連する活動への意欲を持った市民も多くなってくると考えられます。

このような好機を捉え、障害の有無に関わらず、市民・事業者・団体・行政が連携・協働しながらパラムーブメントに関連する様々な活動に取り組むことによって、2020年以降も多様な主体が地域づくりに向けた活動を継続している状態としての「**多様な主体が地域づくりに貢献しているまち**」をレガシーとします。

【第1期推進ビジョンでのレガシー】

- ・ボランティア文化

【5つの取組の方向性における位置付けとの関係】

- ・ひとづくり

⑥ 障害などの有無にかかわらず誰もがスポーツ・運動に親しんでいるまち

【概要】

スポーツに親しみ、楽しむことは、体を動かすことによる爽快感だけでなく、心身の健全な発達や、健康・体力の維持増進、人と人の交流による地域の一体感や活力など、様々な効果をもたらします。また、スポーツは、人間の可能性の極限を追求するという側面を有しており、スポーツに打ち込むひたむきな姿は、観る人にも夢や感動を与えるなど、豊かで活力ある社会の形成にも貢献するものです(川崎市スポーツ推進計画)。

言うまでもなく、オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典であり、この機会にスポーツに対する人々の関心が高まることが予想されます。また、パラリンピックについては、IPC(国際パラリンピック委員会)で、「勇気」「強い意志」「インスピレーション」「公平」がその価値とされており、そこには共生社会を具現化するための重要なヒントが詰まっています。

こうしたオリンピック・パラリンピックの持つ価値を最大限活用することにより、誰もがスポーツに親しんでいるまちづくりを進めるほか、パラリンピックに重点を置く取組を進める中で、障害のある方の自己実現・社会への参加の手段として障害者スポーツを推進するとともに、社会の中にあるバリアを減らしていくことの必要性や発想の転換が必要であるという心のバリアフリーにつなげていくことも必要です。

こうしたことから、誰もがスポーツに親しんでいる状態としての「**障害などの有無にかかわらず誰もがスポーツ・運動に親しんでいるまち**」をレガシーとします。

【第1期推進ビジョンでのレガシー】

- ・誰もがスポーツに親しめる環境
- ・健康づくりや生きがいにつながるスポーツや運動の習慣
- ・アスリートを発掘・支援する環境

【5つの取組の方向性における位置付けとの関係】

- ・スポーツ振興・健康づくり

かわさきパラムーブメント第2期推進ビジョン策定に向けた基本的な考え方～レガシーについて～

⑦ 障害などの有無にかかわらず誰もが文化芸術に親しんでいるまち

【概要】

文化芸術基本法前文では、「文化芸術を創造し、享受し、文化的な環境の中で生きる喜びを見出すことは、人々の変わらない願いである。また、文化芸術は、人々の創造性をはぐくみ、その表現力を高めるとともに、人々の心のつながりや相互に理解し尊重し合う土壌を提供し、多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するものであり(以下省略)」とあり、障害のある方にとっても、文化芸術活動に親しむことは自己表現・自己実現の1つの手段になりえるもので、実際に活躍されている障害のある芸術家も大勢います。

また、オリンピック・パラリンピックは文化の祭典でもあり、例えば、2012年のロンドン大会では、北京オリンピック終了時から4年間のCultural Olympiadが実施され、2012年にはそのフィナーレとして、オリンピック開会1か月前からパラリンピック閉会までの2か月半の間に、「ロンドン2012フェスティバル」という大規模な芸術祭が開催されています。同時に、障害のあるアーティストや芸術団体の作品による、パラリンピックの精神に則ったUNLIMITEDというプログラムも実施されています。

文化芸術の分野においてもスポーツと同様に、オリンピック・パラリンピックの持つ価値を最大限活用することで、障害のある方の自己実現・社会への参加の手段として文化芸術活動の振興を図っていくことは重要であることから、「障害などの有無にかかわらず誰もが文化芸術に親しんでいるまち」をレガシーとします。

【第1期推進ビジョンでのレガシー】

- ・誰もが文化芸術に親しめる環境

【5つの取組の方向性における位置付けとの関係】

- ・都市の魅力向上

III.川崎のブランド力向上に関するレガシー

⑧ 来訪者が「行って良かった」と思えるまち

【概要】

本市は東京2020大会の競技が行われるいわゆる「準開催都市」ではないですが、開催都市に最も近い都市の1つであり、その立地の良さから、国内外の多くの人々が本市を訪れることが予想されます。

この機会を捉え、多くの外国人を魅了することができるような観光資源の活用や、まだ知られざる隠れた魅力を市民と共に発掘し発信していくことが必要です。

こうした取組により、国内外の観光客が継続して本市を訪れている状態としての「来訪者が『行って良かった』と思えるまち」をレガシーとしていきます。

【第1期推進ビジョンでのレガシー】

- ・拠点化、ネットワーク化された観光資源

【5つの取組の方向性における位置付けとの関係】

- ・都市の魅力向上

⑨ 知名度・プレゼンス※が高まった川崎

【概要】

本市は、開催都市に最も近い都市の1つであり、その立地の良さから国内外の多くの人々が本市を訪れることが予想されます。この機会を捉え、海外メディアなどに高度な医療ニーズに対応した革新的な医薬品・医療機器の開発や、先端技術などといった本市の強みをアピールし、世界的な課題解決に貢献していくことが必要です。

こうした取組を通じて、国内外に本市のブランドイメージが浸透した状態としての「**知名度・プレゼンスが高まった川崎**」をレガシーとします。

※プレゼンス…存在感

【第1期推進ビジョンでのレガシー】

- ・国内外に浸透した本市のブランドイメージ
- ・高度な医療ニーズに対応した革新的な医薬品・医療機器の開発による国際的な課題解決への寄与
- ・先端技術に関する世界的なプレゼンス

【5つの取組の方向性における位置付けとの関係】

- ・都市の魅力向上
- ・先進的な課題解決モデルの発信